

# 保健体育科が考える学びの価値

佐藤 道子 矢吹 幸徳 島田 夏純

## 1 保健体育科が考える学びの価値

# Physical Literacy を高めるって気持ちがいい！

## 2 学びの価値の設定理由

### (1) 教科の特性から

中学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説保健体育編（以下「解説」という）に「心と体を一体としてとらえ、生涯にわたって心身の健康を保持増進し、豊かなスポーツライフを実現することを目指すものである」と示されている。前半の「生涯にわたって心身の健康を保持増進し」という文言が保健を通して培う包括的な目標であり、後半の「豊かなスポーツライフを実現する」が体育を通して培う包括的な目標とされている。「豊かなスポーツライフを実現する」という言葉は、平成 10 年告示の学習指導要領から明記された。それから 25 年が経ち、その間に 2 回の改訂を経てもこの言葉が残っているということは、それだけ「豊かなスポーツライフの実現」が大切であるからだと考える。「豊かなスポーツライフ」という言葉は、「それぞれの運動が有する特性や魅力に応じて、その楽しさや喜びを深く味わおうとすること」を意味するため、体育分野に特化していることが分かる。体育分野と保健分野のどちらも網羅する言葉を考えたときに、現在諸外国でも注目されている「Physical Literacy」という言葉に着目した。Physical Literacy とは、生涯を通じた身体活動を通して気付きや理解によって、自らの身体能力を向上させ、自己肯定感を生み出し、その価値を実感することである。国や研究者によってそれぞれに特色をもった捉え方があり、世界共通の統一された概念ではないものの、身体活動へ参加する動機を生み出すこととされる概念である。これは自分の人生を生き生きと楽しみながら生きていくために必要な能力という意味が含まれている。運動能力を高めることだけにとらわれず、「心身共に健康で幸福な生活を営む」ことにも重点を置き、体育・保健体育科の学習を実生活に生かすことのできる学習を行っていく必要がある。そこで保健体育の授業を通して、技能の向上や体を動かすことで、心地よさを味わうことだけでなく、他者と協働することを通して自己肯定感を高めたり、自他の健康に関する課題発見や解決を通して自分の今後の生活に生かすことで、爽快感や達成感を味わったりしてほしいという願いを込めて、本学びの価値を設定した。

### (2) 生徒の実態から

5 月に本校の全校生徒を対象に行った調査（回答数 386 人）では、自分のよさを認められる生徒 80.8%、課題点を認められる生徒が 94.3%いる反面、今の自分が好きな生徒が 63.7%、自分自身に満足している生徒は 47.9%と少ない。また、表 1・表 2 で示した通り、「できた・分かった」、「分かったことが日常生活に生かしたこと」は気持ちよさを感じる生徒は、肯定的回答（当てはまる・どちらかといえば当てはまる）と答えた生徒は教科に関わらず 8 割以上いることが分かる。この同様の質問に「保健体育科の授業において」という条件を加えたところ、表 3・表 4 のようになった。「できた・分かった」時の気持ちの良さの肯定的回答に関しては、表 1・2 とほとんど差はないが、「当てはまる」と断言した割合に関しては、教科に特化したほうが低い。「分かったことが日常生活に生かしたこと」の肯定的回答と「当てはまる」と断言した回答は、教科に特化したほうが高い割合を示した。否定的回答に関しても

表1 できた時や分かった時には気持ちがよい

当てはまる	どちらかといえば 当てはまる	どちらかといえば 当てはまらない	当てはまらない
267	107	10	2
69.2%	27.7%	2.6%	0.5%

表2 分かったことが日常生活で使えた時は気持ちがよい

当てはまる	どちらかといえば 当てはまる	どちらかといえば 当てはまらない	当てはまらない
177	146	50	13
45.9%	37.8%	13.0%	3.4%

表3 保健体育の授業において、できた時や分かった時には気持ちがよい

当てはまる	どちらかといえば 当てはまる	どちらかといえば 当てはまらない	当てはまらない
175	86	8	3
64.3%	31.6%	2.9%	1.1%

表4 保健体育の授業において分かったことが日常生活で使えた時は気持ちがよい

当てはまる	どちらかといえば 当てはまる	どちらかといえば 当てはまらない	当てはまらない
148	102	18	4
54.4%	37.5%	6.6%	1.5%

割合は多くないものの、保健体育科の授業を通して爽快感や気持ちのよさを感じたことのない生徒もいることは確かである。原因としては、現在の中学生は、新型コロナウイルス感染症拡大防止のために約3年間保健体育の授業でも制限の中で学習してきており、コロナ禍以前よりも体力の低下が顕著なだけでなく、友達と協力して課題を見付けたり解決したりする活動の機会もほぼなかったことが挙げられるだろう。上記の結果も踏まえると、現在、本校の生徒には保健体育の授業を通して、「できる・分かる」喜びを味わうことで、その喜びが気持ちのよさや爽快感につながったり、学習したことを日常生活に生かしていくことでよりよい人生を楽しみながら生きる術を考えたりする Physical Literacy を高める必要性があると考えられる。

### 3 授業者が考える学びの価値を伝える工夫

#### (1) 生徒の価値観や先入観を問い直す導入の工夫

「どのようなルールがあったらみんな楽しく活動することができるだろうか」と、今までの授業の中で生徒に問いかけた時、生徒は自分の周りにはいる障害のない生徒のことだけを考えて、ルール作りをしてきた。だから「障害がある」人が行うスポーツ＝「障がい者スポーツ」と捉えていることが多いだろう。しかし、現代は多様な他者とともに生活することが認知され、解説にも「年齢や性別及び障害の有無にかかわらず、運動やスポーツの多様な楽しみ方を共有することができるよう配慮する」と改善の具体的事項が示されている。本年度はここに着目し、授業づくりの根幹から生徒と共に考えられるようにする。そのために、附属特別支援学校や茨城大学特別支援科学コースの学生と連携し、「Zoom Cloud Meeting」を活用しながら自分たちの校種以外ではどのように授業を行っているかを調査したり、自分たちが考えたルールや活動内容について専門的な意見をもらったりしながら授業を構成・提案していき、地域の学校にも広めていきたい。

#### (2) 社会の在り方を構想する学習活動の充実

GIGA スクール構想が示され、令和4年度までに1人1台学習用タブレットや校内の通信環境も整い、本教科も含めて各教科等で様々な活用法の蓄積がなされている。そこで、以下の三つを手立てとして、思考したり判断したりすることの面白さや、友達と共に考えられることで得られる価値観の共有などを通して、Physical Literacy を高めていけるようにする。

##### ① ロイロノートの活用

本校では「ロイロノート School」を利用している。学習履歴の蓄積や協働学習、思考の可視化などに優れているアプリケーションである。単元のガイダンスの時に単元の目標や評価規準を共有したり、単元の見通しを立てたり、単元に応じた準備運動を作成したり、協働学習の一助として資料の共有やプレゼンテーションに使用したりしている。過程を見直しながら学習を進めていくことでより深い思考につながり、それが実技で成功した時には爽快感につながるだろうと考える。

##### ② デジタル学習カードの活用

本年度よりデジタル学習カードを採用している。生徒の提出や教師側の回収が容易になるだけでなく、授業後に早い段階で確認・返却ができることで、生徒と教師が翌日の授業の課題設定をしやすくなったり、生徒自身が授業時間内や家庭での復習や記入に活用できたりすることに有用性がある。また、学習したことを家庭で情報共有することや実生活に生かすことができると考える。

#### (3) 多様な他者と対話する学習活動の充実

##### ① 男女共習型チーム構成

男女共習に関して提言された時から体力・体格差や単元の取り組みやすさなどの問題があったが、「多様な他者」と協働することを鑑み、今までの取組を見直し、男女共習を積極的に導入することとした。今までの同性同士の情報交換に加え、異性を交えた情報交換が加わることで、技能の向上だけでなく、様々な捉え方を知り、共有することができる。協働学習に必要なコミュニケーション力も身に付くと考えられる。

##### ② セルフワーク、ペアワーク、チームワーク、クラスワークでの活動

本校の元保健体育科教員が独自に考えた三つのワーク（セルフワーク、チームワーク、クラスワーク）にペアワークを取り入れた四つのワークを目的と活動内容によって使い分けながら、学習を行う。自分自身で取り組むこと、互いに見合いながら技能の向上や考えを深めること、自分たちのチームの課題を時には動画を撮影して分析しながら発展させること、考えや学習活動の成果をクラスで共有することでよりよい学習環境となり、本校体育科の設定した学びの価値に繋がるのではないかと考えられる。